

小学校における 泳力基準表の活用について

大庭 昌昭
(新潟大学・人文社会科学系)

本日の内容

1. はじめに
泳げるとは？ 可泳距離の議論
泳力基準表について
2. アンケート調査について (中間報告)
基準表の有無 活用の有無 内容の差異
3. まとめ (目指していること)
国民皆泳につながる泳力基準表の作成

1 はじめに

泳げるとは？

日高* (2008)
<泳げる基準に関する研究報告や文献は見当たらない>
<経験を踏まえ各々の基準を指標として後世に伝えていたのでは？>

- ◎可泳距離について (調査；主観的な判断)
小中学校段階：～25m、高等学校期：～100m
一般人 (過半数が支持)：50～100m (男性) 25～50m (女性)
- ◎浮漂能力との関係 (実際；同一人物の能力から)
101m以上の可泳距離で浮漂能力が飛躍的に増大
400m以上の可泳距離で全員10分以上の浮漂
- ◎その他
速さにつながる傾向あり 長く潜ることにつながる傾向あり

*日高敬児 (2008)、「泳げる」ということについて、佐賀大学

泳げるとは？

日高敬児 (2008) 「泳げる」ということについて
<泳げる基準に関する研究報告や文献は見当たらない>
<経験を踏まえ各々の基準を指標として後世に伝えていたのでは？>

- ◎可泳距離について (調査；主観的な判断)
小中学校段階：～25m、高等学校期：～100m
一般人 (過半数が支持)：50～100m (男性) 25～50m (女性)
- ◎浮漂能力との関係 (実際；同一人物の能力から)
101m以上の可泳距離で浮漂能力が飛躍的に増大
400m以上の可泳距離で全員10分以上の浮漂
- ◎その他
速さにつながる傾向あり 長く潜ることにつながる傾向あり

可泳距離による評価は
簡便かつ有効な方法である

可泳距離の議論

日高敬児 (2008) 「泳げる」ということについて
<7つの項目>

1. 浮漂能力 2. 距離泳能力 3. 速泳能力 4. 潜水能力
5. 飛び込むことができる 6. 水中自在性能力 7. 水中で溺れない

◎可泳距離 (2.距離泳能力) は、1. 3. 4.へ繋がる

> 可泳距離だけの評価で良いのか？
(1) ある程度泳げるようになった後は？
(2) ある程度泳げるようになる前は？
調べてみよう!!!

泳力基準表について

- 泳力を評価するものとして、各学校で活用している実態があるようだ。
- 泳力基準表の現状把握で、前述の疑問を改善する糸口が発見できるのでは？
- 新しく小学校学習指導要領に「安全確保につながる運動」が示されたことは好機である。
- 新しい基準表を作成し、活用することで「国民皆泳」に繋げたい。

2 アンケート調査について

アンケート項目

1 基礎的事項

○学校所在地 _____区 ○児童数 _____名 (男子 _____名 女子 _____名)

○水泳系授業の平成29年度実施回数について
 第1学年；実施回数 (回 時間) 第2学年；実施回数 (回 時間)
 第3学年；実施回数 (回 時間) 第4学年；実施回数 (回 時間)
 第5学年；実施回数 (回 時間) 第6学年；実施回数 (回 時間)

○プール授業の実施形態について。
 ()
 ・1回の授業で、どれくらいの学級数、人数が入水するのか
 ・複数学級で利用する場合、どのような組み合わせで実施するのか？

アンケート結果

○調査協力校 231校
 (新潟市 73校、東京都 125校、関西 24校、その他 11校)

○児童数 (全体:453.3±236.1名)
 (男子 232.7±121.4名、女子 219.4±115.5名)

- ・新潟:372.8±246.0名
 (男子 190.5±125.8名、女子 182.2±120.7名)
- ・東京:462.5±201.9名
 (男子 237.7±103.7名、女子 222.6±98.9名)
- ・関西:623.7±243.8名
 (男子 320.0±123.9名、女子 303.7±120.8名)

○調査協力校 231校
 (新潟市 73校、東京都 125校、関西 24校、その他 11校)

○児童数 (全体:453.3±236.1名)
 (男子 232.7±121.4名、女子 219.4±115.5名)

- ・新潟:372.8±246.0名
 (男子 190.5±125.8名、女子 182.2±120.7名)
- ・東京:462.5±201.9名
 (男子 237.7±103.7名、女子 222.6±98.9名)
- ・関西:623.7±243.8名
 (男子 320.0±123.9名、女子 303.7±120.8名)

アンケート結果

○水泳系授業の平成29年度実施回数について
 9割以上の学校が1回2時間で授業を実施。

全体:1年(11.3±2.2)2年(11.3±2.3)3年(11.4±2.2)
 4年(11.4±2.1)5年(11.6±2.4)6年(11.7±2.4)

- ・新潟:1年(10.5±1.9)2年(10.4±1.7)3年(10.9±1.7)
 4年(10.7±1.5)5年(10.4±1.5)6年(10.5±1.4)
- ・東京:1年(11.7±2.2)2年(11.8±2.3)3年(11.6±2.3)
 4年(11.7±2.3)5年(12.1±2.4)6年(12.3±2.5)
- ・関西:1年(12.2±1.8)2年(12.7±2.2)3年(12.4±2.2)
 4年(12.3±1.7)5年(13.0±2.3)6年(13.2±2.5)

新潟 < 東京 < 関西
結果に影響するか？

○水
9割以上

全体:1年(11.5±2.1)2年(11.6±2.2)3年(11.4±2.2)
4年(11.4±2.1)5年(11.6±2.4)6年(11.7±2.4)

- ・新潟:1年(10.5±1.9)2年(10.4±1.7)3年(10.9±1.7)
4年(10.7±1.5)5年(10.4±1.5)6年(10.5±1.4)
- ・東京:1年(11.7±2.2)2年(11.8±2.3)3年(11.6±2.3)
4年(11.7±2.3)5年(12.1±2.4)6年(12.3±2.5)
- ・関西:1年(12.2±1.8)2年(12.7±2.2)3年(12.4±2.2)
4年(12.3±1.7)5年(13.0±2.3)6年(13.2±2.5)

アンケート結果

○プール授業の実施形態について。
学校規模に大きく影響しているようである。学年の人数が多ければ学年毎で実施する。
1学年1学級など少人数の場合は低学年・中学年・高学年などのグループで実施する。
1回で入水する人数については、今後詳細に検討していきたいと思っているが、100名以上（最高で160名程度）が同時に入水している学校が、予想よりも多く存在していた。

アンケート項目

2 泳力基準表について

○貴校には、共通の泳力基準表がありますか？
回答【あり・なし】

- ・【あり】の場合
その基準表を授業（特に技能）の評価に使用していますか？
回答【はい・いいえ】
どのように使用しているのか、教えてください。
- ・【なし】の場合
どのように授業（特に技能）の評価をしていますか？
【

アンケート結果

○泳力基準表について
全体「あり 74.0%」「なし 24.2%」
「あり」新潟:56.2%、東京都 95.9%、関西 25.0%
・地域によって違いがありそう。

ありの全体「活用 92.4%」
「活用」新潟:95.1%、東京都 88.1%、関西 83.3%
・泳力基準表を保持している学校では、技能の評価として継続的に活用しているようである。ただし、泳力のみで学習評価をしているわけではない。

アンケート結果

○泳力基準表について
「基準なし」や「評価に活用していない」と回答した学校での評価については、今後さらに検討を進めるが、
学年や学校で毎年共通の評価基準（泳力だけではなく、通知表に使用可能な評価など）を作成してそれをもとに行っている学校が多いようである。
したがって、活用しやすい新しい学習指導要領に準拠した「泳力基準表」を提案すれば、多くの学校で利用してもらえるのではないだろうか？

アンケート項目

3 平成29年度
貴校の子どもたちの実態について 学年毎の実数を教えてください。
○泳力基準表に合わせて最も高いレベルで一人一回のみカウントして下さい。
○泳力基準表を活用していない学校では、できるだけ実態がわかるような資料を提示して下さい。

(例)		1年	2年	3年
12級	水の中に入って遊ぶことができる	5名	2名	2名
11級	水に顔をつけることができる	9名	5名	1名
10級	水の中で石拾いをすることができる	3名	12名	
9級	伏し浮きで浮くことができる			8名
8級	正しい伸びで進むことができる			8名
7級	自由な泳ぎで5m進むことができる			
6級	自由な泳ぎで10m泳ぐことができる			

アンケート結果

◎泳力基準表の内容について
 (1)可泳距離以前の内容と関連して
 「顔付け」と「水中歩行」のどちらが先(易しい)とするか?その後の「もぐる」→「浮く」→「け伸び」は類似した流れ。
 (2)初歩的な泳ぎ(泳法までの段階)に関連して
 クロールや平泳を学習する前段階としても可泳距離を記している。「3m~25m」まで多様。
 短い距離を示している学校(10m以下)では、それ以上の距離において「泳法(クロールや平泳)による可泳距離」を示している場合が多い。

アンケート結果

◎泳力基準表の内容について (3)泳法の可泳距離
 「クロール(Cr)が先」「クロールか平泳ぎ(Br)のどちらか」で別れるが、「Brが先」の学校はない。
「Crが先」の中でも
 「25mCr→50mCr→25mBr→50mBr」と
 「25mCr→25mBr→50mCr→50mBr」がある。
「CrかBrのどちらか」の中でも
 「25mCrかBr→50mCrかBr→25m両方→50m両方」と
 「25mCrかBr→25m両方→50mCrかBr→50m両方」がある。
 特に種目を特定していない学校や50m以上の距離が明示されている学校も存在している。

まだ検討中だが

(1)25m(種目問わず)泳げる児童の割合について
 新潟「6年生 81%、5年生 67%、4年生 51%」
 東京「6年生 85%、5年生 77%、4年生 65%」
 関西他「6年生 84%、5年生 73%、4年生 59%」
 ?地区ごとに「有意な差」があるといえるのか、基となるデータの精査も含めて、今後詳細に検討する。
 ?数字だけを見ると、やや新潟は低い傾向。
 ?授業時数・入水する人数・泳力基準表の有無等、何か影響することがあるのか、検討していく。

まだ検討中だが

(2)呼吸の習熟度が泳距離に与える影響について
 呼吸のみに関わる泳力基準表の項目はほとんど確認されなかった。多くの基準表が可泳距離をもとに級が設定されている。
 「可泳距離」は、とても簡便で確実な泳技評価基準として、長年用いられてきたようである。
 <より良い基準表としての検討>
 ?15mから25mまでの間に、一旦上達の壁が存在しているようにも感じている?
 !泳力向上の為に必要な要素として「十分な呼吸の獲得」に関連する項目を付加することを検討。

スイミングクラブの進級表

<ul style="list-style-type: none"> グライドキック7m グライドキック5m 板キック25m(呼吸付き) 板キック15m 	<ul style="list-style-type: none"> 板キック10m 板キック25m(ヘルパー付き) 板キック15m(ヘルパー付き) 板キック10m(ヘルパー付き) 	<ul style="list-style-type: none"> グライドリターン ジャンプ呼吸 だるま浮き
<ul style="list-style-type: none"> けのび3m(ヘルパー付き) 伏し浮き5秒(ヘルパー付き) 板フロート5秒(ヘルパー付き) 顔つけ10秒(もぐれる) 	<ul style="list-style-type: none"> 顔つけ5秒 水中開眼 顔つけ3秒 自転車こぎができる 泣かない、顔洗いができる 	<ul style="list-style-type: none"> ホッピング 大きな声で挨拶

認定項目 安全水泳指導

スイミングクラブの進級表

JSS, KONAMI, NAS, ITOMAN, SA, RUNE
 ◆「呼吸」に関する項目が明示。
 バブリング・ポビング・連続ポビング
 ◆「ヘルパー付」での内容が明示。
 学校で「一人一つの準備」ができるのか?
 ◇安全確保につながる運動との関連
 「背浮き」「浮き沈み」への流れ?

まとめ

3 目指していること

何を目指しているか？

- ◇ 国民皆泳（小学校までに泳げる！）
「本当の浮き＝呼吸力を基にした浮き」→泳力↑
↑
- ◇ 泳力基準表を基に「指導と評価の一体化」へ
- ◇ 泳力基準表を基に「指導能力差の解消」へ
→ 「指導内容の厳選」👉安全確保につながる運動
↑
- ◇ 現在の泳力基準表における課題の抽出
- ◇ 泳力基準表の活用に関する実態把握
→ 「呼吸の能力」に関する内容の追記（明記）